



わたしの聖戦

女性が働くということ

102

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

東日本大震災について

ものを書いたり、人前で話す機会の多い者なら、誰しも3月11日の東日本大震災について触れずにはいられないだろう。

前日の10日、たまたま知人と「ヒア・アフター」という映画を観た。クリント・イーストウッド監督によるもので、公開から日にちが経ってはいしたが、時間の都合がちょうど良かったことから選んだ映画だった。内容は、死者と話のできる主人公がいて、そこに愛する者を失った人々が絡むというもので、評判どおり、確かに面白いのだがイーストウッドの映画にして

は少し物足りなさが残る作品だった。

この映画の冒頭に津波のシーンが出てくる。ストーリーよりもそのシーンの迫力に度肝を抜かれた。よくできていたね、凄かったね、リアルなCGだった、などとそちらの感想ばかりを言い合った。本当に怖かった。

ところが、その24時間後に大地震が起き、テレビで津波が押し寄せる映像を嫌というほど目にすることになった。

映画を観て、「リアル」と言っていた自分を恥じた。感心した映像は、これまで観た映画のどの津

波・洪水のシーンより迫力があつたという、ただそれだけのことだったのだ。そう思い知らされるほどテレビに映し出される津波と人々の叫び声は想像を絶していた。しかもそれさえも私はカメラのこちら側でただ呆然と



1960年代、空前の西部劇ブームを巻き起こした

Clint Eastwood

伝説のローハイド

RAWHIDE

名付けられたこの大災害は、死者や行方不明者のすべてをいまだ把握できず、原発の問題は解決の糸口さえ見えない状況である。津波が去った後の悲惨さは今さら言うまでもない。被災地から遠く離れた東京でも、ネオンは消え、列車の本数が減り、

一時は人影が途絶えた。余震も続き、何が余震で何が本震なのかわからなくなっているくらい、日本は「揺れている」。これこそが現実だ。

ボブ・ディランの「風に吹かれて」という歌がある。それ相應の年齢の人のみならず若い人もどこかで耳にしたことがあると思う。いうまでもなく、ディランはフォークソングの神様であり、原点であり、歴

史に残る名曲である。反戦歌として知られるこの曲のなかに、こんな歌詞がある。

「どれほど多くの人が死なねばならぬのか
死が無益だと知るために
に

その答えは
風に吹かれて
誰にもつかめない」

戦争のない国にあつて、この歌詞がしみじみ心に染みる。いったい、どれくらいの人を犠牲にしたらしいのか、皆目見当もつかない。戦争とはまた違う強敵を前に、どうしたらいいのかわからず、誰もが途方に暮れている。しかし、生き残った者は顔をあげ大地に足をつけ、前に進まなければならぬ。

与えられた運命を粛々と受け入れること、それこそが本物の「強さ」につながるのだと、今は信じるしかない。

イラスト・三浦義雄
タイトル・浅井健史